

# 「田植歌」が、 聞こえていた頃。

その歌は、  
豊作祈願の「神事の歌」。  
労働のツラさを  
まぎらわせてくれた「仕事歌」。  
忘れかけられた「郷土の歌」。  
いつの頃からか歌い継がれる  
栢山の「田植歌」。



小田原市、栢山。このあたりは昔から稲作が盛んで、かつては円札にその肖像が入っていた小田原の偉人「二宮尊徳」も、ここ栢山で生まれ、「積小為大」の精神で、田植えが終わったあとに捨てられた苗を、荒地の水たまりに植えて、一俵の籾を収穫したという逸話を残している。

そんな栢山に「田植歌」という、昔ながらの「仕事歌」が残っている。いや、正確に言うと、「栢山田植歌」(エ〜〜ターチマ〜ス)

歌保存会」のみなさんが月に一回集まって練習をし、小学生の授業や、市民会館での郷土芸能の催しなどをしながら、細々と守り、残している、ときちんと言い直したほうがいいのかもわからない。「仕事歌」というのは、作業のツラさをまぎらわすために生まれた歌のこと。「栢山田植歌」は栢山でいつの頃からか田植えの時に歌い継がれてきた。月に一回、東栢山公民館の二階で行われている練習にお邪魔すると、会長の柏木文子さんが「せっかく来てくださったから、先に一度歌いましょうか?」とこちらのスケジュールを気づかせてくれ

た。机の上には、歌詞が書かれた紙とチョコレートのお菓子が置かれている。「いつも通りやっていただいいんです。それを見に来させてくださいませんか」とお願いすると、「いつもは、こうして集まっておしゃべりしながら、練習してるのと、楽しそうに前置きをした後、とりあえず一度歌うからと、みなさんで歌って聞かせてくれた。\*今日の〜田〜の〜エ〜たる

栢山田植歌の風景



\*「たろじ」は「田主」(たあるじ = 田祭りを主宰する人)のことと思われる。歌詞には、他に田植えの様子や栢山の風景の他、鶴や亀のめでたい動物が読み込まれ、豊作の祈りが込められている。